

居酒屋

ほったくり

秋川滝美 Takimi Akikawa

5

目次

命の眠る場所……………235

モーニングオムレツ……………183

最初の一步……………127

窓の外に見える風景……………57

実りをもたらすもの……………5

柚子と茗荷の冷たい味噌汁

里芋の甘・ハムケーキ

カワハギおひらき汁

上戸とびさしソーシートの煮込み汁

ズッキーニと豚肉の炒め煮

実りをもたらすもの

もうお盆も過ぎたというのに、まだまだ夏の暑さが居座っていて、秋の気配はうつすらとも感じられない。特に昼下がりの熱気といったら、カレンダーの立秋という文字を切り抜いて一ヶ月ほど先の日付に貼り直したくなるほどである。

東京下町で居酒屋『ぼったくり』を営む美音は、仕込みが終わって店を開けるまでの間をウォーキングの時間と決め、健康増進に努めている。だが、この暑さでは、とてもじゃないけれど外に出かける気にはなれなかった。

もういつそスポーツジムにでも行ってみたほうがいいのかも……

それなら天気や気温の影響も受けにくいはずだ、と考えながら、美音は引き戸を開けた。

ウォーキングは無理でも、せめて先日クリーニングに出したブラウスとパンツを受け取りに行こうと考えてのことだった。ところが、店を出るか出ないかのうちに、大きな声が聞こえてきた。

「あ、お姉ちゃん、よかった！ まだ出かけてなかったんだ！」

暑さにも負けず元気な声を張り上げているのは、妹の馨だった。何かと目をやれば、彼女はひとりの女性を支えながら、ゆっくりとこちらに向かってくる。

「どうしたの？」

美音が驚いている間に、馨は女性を『ぼったくり』の店内に入れ、小上がりに腰掛けさせた。

「とりあえずお水ちょうだい。それと、保冷剤あったよね？」

「あるわよ」

女性は初老といった感じ。ただし、三日に一度『ぼったくり』を訪れる常連のウメよりは若そうである。

見るからに具合が悪そうな女性の様子に、美音は慌てて冷蔵庫から水と保冷剤を取り出した。直接身体に当てては冷たかろうと、手近にあった薄手のタオルで保冷剤をくるむ。

馨は女性に水のペットボトルを渡して飲むように促したあと、女性の脇の下に保冷剤を挟み込んだ。

「保冷剤、もつといる？」

「あるだけちょうだい！」

ペットボトルの水を半分ぐらい飲んだのを確認して、馨は女性を横にならせた。新たに受け取った保冷剤のタオル包みを反対側の脇の下、それから内股にもあてがう。

思わぬところを冷やされて仰天している女性に、馨は、大きな血管が通っている場所なので、体温を下げるのに効果的なのだと説明している。どこからどう見ても、熱中症の手当だった。

「大丈夫ですか？ お医者様をお呼びしましょうか？」

この時間、近くにある太田医院は昼休み中だ。けれど、具合の悪い人を放ってなんておけない太田先生のことだから、わけを話せばきつと往診してくれるだろう。

「大丈夫。少し休ませてもらえば……」

女性は小さな、それでいてはつきりした声でそう答えた。

「目眩や吐き気はありますか？」

馨はそう訊ねながら、そつと女性の手の甲をつまんでいる。つい最近テレビで見た、脱水症状のチェックを試みているのだろう。深刻な脱水症状に陥っていると、つまんだ皮膚が元に戻らなくなるらしい。幸い、女性の皮膚はすぐに元に戻った。少し休めば大丈夫という言葉を通じてよさそうである。

「よかった。でも、水だけじゃなくて塩分も取ったほうがよさそうだね」

馨はそう言いながらカウンターのの中に入り、流しの下にかがみ込む。おそらくそこに置いてある壺から梅干しでも取り出すつもりなのだろう。

確かに熱中症に梅干しは効果的だ。だが、いくら治療目的とはいえ、梅干しだけをかじるという

のは辛いのではないか。美音はちよつと考えたあと、自分もカウンターのの中に入り、冷蔵庫を開けた。

「馨、こつちのほうがいいんじゃない？」

「え……？ あ、お味噌汁か！」

塩分と水分を同時に補給できる味噌汁は熱中症にはもってこいである。

さすがにこの暑さの中、熱々の味噌汁はすすめにくいのが、幸い今日は『本日のおすすめ』に入れようと思つて冷やしておいた茄子の味噌汁がある。火をしっかり通して柔らかくなった茄子に茗荷と大葉の千切りを添えた冷たい味噌汁は、暑い夜のご馳走。炊きたてのご飯とこの味噌汁を締めにしたがる常連客は多かった。

「お茄子のお味噌汁なんですけど、冷たいのがお嫌いじゃなければいかがですか？」

味噌汁は熱くなくて、という人もいる。この女性もそのひとりだったら、代わりにスイカでも切ろうと思ひながら訊ねると、女性は弱々しく、それでもはつきりと頷いた。

「冷たいお味噌汁、好物だよ……」

「よかった！ じゃあ、すぐによそいますね」

美音は大ぶりの碗を取り出し、冷たい味噌汁をたっぷり注いだ。茄子のせいで味噌の色がわずかに青黒くなっている。それをごまかすように濃い緑の大葉をふんだんに散らす。

「起き上がれそう？」

女性が頷くのを確認してから、髻が背に手を添えてゆつくりと身体を起こさせる。箸と椀を渡すと、彼女は待ちかねたように冷たい味噌汁を一口啜った。

「ああ……よく冷えてる」

「しょっぱすぎませんか？」

「いい塩梅だよ。すごく美味しい」

女性は続いて茄子を一切れ口にし、一緒に口に入った茗荷の歯触りににつきりと笑った。

「夏のご馳走だね。もう立秋も過ぎたから、夏つて言うのもあれだけど」

「こんなに暑いんですもの、まだまだ夏ですよ」

「そうそう。だから油断しちゃダメ。こんな暑い盛りに出歩くんなんてもってのほか」

「そうは思ったんだけど、どうしても娘のところに行きたくて……」

孫に食べさせたくてね、と女性は隣に置いた手提げ袋に目をやった。手提げ袋は大きい上にはかなり重そうに見える。

「野菜なんだ。今朝、畑で穫ったばかりだから新鮮なうちにと行ってさ」

畑と聞いて、美音はちよつと首を傾げた。このあたりはもっぱら商店街と住宅地で、畑を見た記憶はない。だが、手提げ袋から覗いている野菜は色鮮やか、しかも皮もぴんと張っていて取れたてにしか見えない。きっと美音が知らない場所にあるのだろう。

「このあたりにも畑があるんですね。気が付きませんでした」

美音の言葉を聞いたとたん、女性は急に落ち着かない様子になった。どうしたのだろう、と思っていると、後ろめたそうに言う。

「ちよつと行った先に、川があるだろうか？ あそこ……」

「ああ、あの川原の畑……」

ここから歩いて二十分ぐらいのところに、川幅こそ広いが水量の少ない川がある。かつてはもっと水量も多かったそうだが、最近では随分減って、川よりも川原のほうが広いほどだ。近頃では、その広い川原を使って園芸を業しむ人が増えてきている。一ヶ月ほど前、たまには違う方角に散歩に行こうと髻に誘われた際に、川原に広がる畑を見て驚いたことを、美音は思い出した。

連綿と続く畑はそれなりに丹精込めて作られているようで、葉陰にはちらほら見慣れた野菜が実っていた。そ



の中に一際見事で、目を留めずにいられない一画があった。プチトマト、茄子、ピーマンといった作りやすい野菜ばかりではなく、里芋やズッキーニ、大玉のトマトなど、手入れが大変そうだなと思われるものもたくさん育っていた。

「あの川原はすごいですよ、畑がずらりと並んでいて。素人には手に負えないような野菜を植えているところもありましたっけ。しかもどれもすごくよくできて、びつくりしました」

「見たことがありませんかね」

「ええ。特に里芋とかトマトが何本も植えてあるところはすごいです。里芋の葉っぱはつやつやですし、大玉のトマトが実割れもせずに真っ赤に熟して」

「ああ、それがうちだよ」

さっきまでの後ろめたそうな感じが鳴りを潜め、女性は嬉しそうに畑の話始めた。

「最近はずっとトマトばかりで、大きなトマトを作っている人も減ったみたいだね。大玉のトマトは食べ応えもあるし、使い勝手もいいんだけどさ」

「わかります。それに、ズッキーニが生えているのを見たのは初めてです」

「おや、あんた方、あれがズッキーニだっけわかったんだ」

せいぜい裏のプランターに大葉を植えるのが関の山、畑仕事などしたこともなかったが、これでも美音は食に携わる人間の端くれである。ズッキーニがどんな植物で、どんな風に実がなるかぐら

いは知っていた。

「カボチャの一種なんですってね。初めて聞いたときはびつくりしましたけど」

「そうだろう、そうだろう。中にはキュウリと同じようなものだと思ってる人もいるからね」

形だけ見ればそうだけど、味はやっぱりキュウリとは違う、と美音が答えると、女性は嬉しそうに頷いた。おそらく、畑の作物のことをよく知っている人間に出会えて嬉しかったのだろう。

「あの畑ならさぞやたくさん穫れるでしょう。お孫さんに届けたくなる気持ちもわかります」

「まあ、そういうわけで時々娘のところへ届けに行ってるんだけど、今日は家のことを済ませてからと思っただけがよくなかった。一番暑い時間にバス停まで歩くことになってしまっ……」

息は上がるし、目眩はしてくるし、どうしようと思っただけならこの人が声をかけてくださっただよ、本当に助かった、と女性は改めて馨に頭を下げた。

「道ばたで、肩で息している人がいたから、大丈夫かなと思って声をかけたんだよ。とにかく涼しいところで休んでもらわないと、と思っただけで連れてきちゃった」

馨が女性を見つけたのは商店街からバス通りに続く道のことだったそうだ。救急車を呼ぶかどうか迷ったものの意識はあるし、少し休めば大丈夫かと思っただけ『ぼったくり』に連れてきたという

「そうだったの。大事に至らなくてよかったわ。まだしばらくは涼しくなりそうにもないし、日が陰るまで休んでいってくださいな」

美音がそう声をかけると、女性はちょっと困ったような顔になった。

「娘は勤めに出ていて、午後にならないと戻らないんだよ。これぐらいの時間に届けて、娘が帰るまでに夕飯の支度をしてあげばいいと思ってね。でもやっぱりこの暑さの中、出歩くのは無謀だったね……」

「そういうことだったんですか」

残念ながら今日は無理そうだと女性はしょんぼりしている。美音と馨は顔を見合わせ、次いで壁に掛かっている時計を見上げた。時刻は午後三時になるところ、まだしばらく暑さは去らない。既に体調が悪くなっているのに、また外に出るのは無謀だった。

「しょうがないから、今日は諦めることにするよ」

日が少し陰かげつたら家に帰るから、それまでもうしばらくお邪魔させてほしい、と女性は申し訳なさそうに言った。

「休んでもらうのは全然かまいませんけど……」

美音は、なんとか娘さんのところに野菜を届ける方法はないかと、思案を巡らす。車でも持っていれば送っていつてあげられたのに……と困った顔になった美音を見て、女性は勘違いをしたらしい。

「あ、店を開けるまでには失礼するよ!」

店の造りからして、ここは居酒屋さんなんだろう? 何時に店を開けるんだい? と訊かれて、

馨はぶんぶんと首を振った。

「そんなこと気にしないで。それより、娘さんのところってここから遠いの?」

「バスで三十分ぐらいかねえ……」

「それじゃあ、ちょっと間に合わないか……」

馨が大きなため息をついた。馨はきつと、自分が代わりに届けに行こうと思ったのだろう。

だが、ここからバス停まで歩いて、それからバスに乗って、娘さんの家を探して……では、開店までに戻ってこられない。

「いいんだよ。野菜は畑にまだまだあるし、日を改めるよ」

きつとまた機会はあるだろう、と言いつつも女性はさらに肩を落とす。野菜のことよりも娘さんやお孫さんと過こげせなくなつたことのほうが残念そうだった。

「お嬢さんは車とかお持ちじゃないんですか?」

「あるにはあるけど、仕事を終えて保育園に孫を迎えに行つて、それから晩ご飯の支度……とてもじゃないけど迎えに来てくれなんて言えないよ」

四歳になる孫は男の子で、いつもお腹を空すかしている。家に帰ったらできるだけ早くご飯にしてやらないとかわいそうだと女性は言う。

「迎えに来てもらって、一緒に外でご飯とかは？」

それなら食事の支度もいらぬし、お孫さんもすぐに食べられる、と馨が提案したが、女性は小さく首を振った。

「それができれば苦労はないんだけど、うちの孫はちよつとアレルギーがあつてね。外食が難しいんだよ」

牛乳も小麦粉も大豆もだめで、保育園の給食も食べられずお弁当を持参している。アレルギー対応の飲食店はないでもないが、調理器具にまで気を遣ってくれるところは少ない。ひやひやしなから外食するよりも、家で作ったほうが安心なのだと言っている。娘さんは言っているようだ。

「野菜にしても、あたしが作ったものなら農薬やらなんやらの心配もないからね……」

女性が無理をしても野菜を届けようとした理由は、新鮮云々もさることながら、お孫さんにとつて安心な食べ物ということが大きかったのか……

美音は改めて感心するとともに、なんとかしたいという気持ちをさらに強くした。

「馨、お店に間に合わなくてもかまわないから、届けに行つてあげて」

「でもそれじゃあ、このお婆……じゃなくて、えーつと……ごめんなさい、お名前をお訊きしてもいいですか？」

お婆さんとお婆あさんの選択に迷い、さすがにどつちにしても失礼だと悟つたらしい。おもむろ

に謝つたあと、馨は女性に名前を訊いた。

女性はそんな馨を笑いながら、自分はツキミというのだと名乗った。

「じゃあ、改めて。届けに行くのはかまわないけど、それじゃあツキミさんが娘さんやお孫さんに会えないでしょ？」

ツキミは野菜の入った手提げの他に小さなポストンバッグを持っている。一泊分ぐらいの荷物が入りそうな大きさだった。もしかしたら野菜を届けたついでに、一晩泊まってくるつもりだったのかもしれない。

「そうねえ……、あ、じゃあ、うちで作られては？」

娘さんが仕事を終えて、お孫さんを連れて帰るのは夕方らしい。それならば、しばらく休憩したあと、ここで食事を作つてはどうか。作り終える頃には日も陰つて、少しは過ごしやすくなるだろう。

「あ、それはグッドアイデアだね！ お料理ならあたしたちだつて手伝えるし、娘さんが迎えに来てくれたとしたら家に帰つてすぐご飯にできるよ」

「でもそれじゃあ、あんまりにも……」

迷惑をかけすぎる、とためらうツキミに、美音はにっこりと笑いかけた。

「私たち、早くに両親を亡くしてるんです。だから、いつも、親孝行のまねごとでもいいからしてみたいって思つてたんですよ。半分私たちのわがままみたいなものですか」

「立派な娘さんがいらっしやるのに、あたしたちみたいなのはお断りかもしれないけど、気分だけでも味わわせてもらえると嬉しいなあ……って」

姉妹の双方にそう言われ、ツキミは返す言葉をなくしている。だが、実際のところ、日が沈んで涼しくなるまでの時間をここで過ごすならば、その時間を使って料理をするというのは名案のはずだ。しばらく考えた後、ツキミはすまなそうに頷いた。

+

「おや、ズッキーニかい？ こりやまたハイカラだねえ」

カウンターに出されている料理を見て、ウメがからからと笑った。

料理を終えたあと、ツキミは手提げに入れてあつた野菜を美音に差し出した。ここまで世話になってお礼もしないのは申し訳なさすぎるというのだ。

『でもそれじゃあ、お孫さんの分が……』

今夜の分はあるにしても、と美音は心配したが、ツキミはぜんぜん大丈夫だと笑った。

『おかげさんで野菜は豊作。畑にまだまだあるし、帰りは娘が車で家まで送ってくれるって言うから、そのときに獲れたてを渡すよ』

それを聞いて、最初は遠慮していた美音も、ありがたく頂戴することにした。何よりも味見をさせてもらったズッキーニがあまりにも美味しくて断り切れなかったというのが真相。

ツキミの孫は化学物質にも敏感で、添加物にもかなり気を配らなければならないらしい。だからこそツキミは無農薬で野菜を栽培し、調味料まで厳選して孫のために料理を作っているそうだ。今日、彼女が作った料理はズッキーニとトマトを豚肉と一緒にコンソメで煮込むだけというシンプルなものだったが、取れたての野菜ならではの深く濃い味わいに美音も警も目を見張った。だが、それ以上に料理の味を上げていたのは、ツキミの孫を思う気持ちだったのかもしれない。なにせ彼女は、固形のコンソメスープまでアレルギー対応のものを持参していたのだから……

野菜をもらった美音は、ツキミと同じように煮込み料理にすることも考えたが、彼女以上に温かい味にできるかどうか大いに疑問。あれこれ考えた結果、『本日のおすすめ』には、ズッキーニと豚肉の炒め物を入れることにした。

幅広の千切りに刻んだ豚肉に予め醤油とみりんを味付けし、半月状に切ったズッキーニとともに炒めたあと溶き卵を絡める。たつぷりの生姜と、ほんの少量のニンニクを入れた炒め物は、酒の肴にもご飯にもびつたり一品である。現に、カウンターではリョウがそれをおかずにしわしわとどんぶり飯をかき込んでいる。この暑さの中でも衰えを見せぬ食欲は、飲食を商う者にとつても頼もしい限りだった。

「まったく、相変わらずよく食べるねえ、この子は」

「だってウメさん、この炒め物、めっちゃ飯に合うっす。ズッキーニってカボチャの一種だって聞いてたから、おかずにはどうなんだ？　と思っただけど、濃いめの味付けで、肉もたっぷり。もう言うことないっすー！」

「それでいきなりご飯を食べてるってわけかい？」

「だって俺、今日は朝から外に出っぱなしで、まともに昼飯も食えなかったんす。もう腹が減って、腹が減って、酒どころじゃなかったっす」

「おや、そうかい」

あなたの空きつ腹は今日に始まったことでもあるまいに、と笑いながら、ウメは目の前に出された焼酎しょうちゆうの梅割りをグビリとやった。

「いやー、こういつまでも暑いとやってらんねえなあー！」

首から下げたタオルで汗を拭き拭き入ってきたのは、足場職人のトクだった。

今年の冬、トクの弟子が、冬は足場が冷えて辛いところぼしたらしいが、夏の暑い盛りに足場を組むのも大変だろう。むしろトクのように身体を使って仕事をする人には、冬よりも夏のほうがたえるに違いない。

「お疲れさまでした。まずビールにしますか？　よく冷えたクラフトビールが……」

ビールほど汗に似合う酒はない、と思っただけの提案だったが、意外にもトクはきつぱりと断った。

「いや、今日は、現場近くの自販機のお茶やら水やらが軒並み売り切れ。スポーツ飲料すらなかった。残ってるのは炭酸ばかりで、さすがに飽きちまった。泡が立つてない酒がいいな」

そう言いながら『本日のおすすめ』に目をやったトクは、おっ！　と小さく声を上げた。

「なんでえ、カワハギのみりん干しが入ってるじゃねえか。これじゃあ日本酒以外の選択肢はねえだろうー！」

トクは魚の干物が大好物だ。わけてもみりん干しには目がない。鯖さばや鰯いわしといった青魚のみりん干しをつまみにぎんぎんに冷えた日本酒を呑むのは、彼の夏の楽しみのひとつだった。

冷蔵庫にはトク好みの辛口の酒が何本も冷えている。その中から、みりん干しに合う銘柄めいがらを選べばいい。そう思っただけの顔を見た美音は、依然として引かない汗に眉をひそめた。

——この汗じゃ、さぞかしのどが渴いているだろうなあ……

どう考えても最適はごくごくやれるビールだ。でも、泡が立つ酒は嫌だと本人が言っている。いくらよく冷えていて、のど越しがいいといっても、冷酒をごくごくやるわけにはいかない。

「トクさん、たまにはウイスキーの水割りはいかが？　意外にみりん干しにはぴったりなんですけど……」

「水割りか……なるほど、それならのどの渴きにもいいな。確かに、みりん干しは甘いからウイスキーには合いそうだ」

「スモーキーなタイプがおすすめです」

「スモーキーか……。輸入物で燻製香が強いのは苦手だな」

「じゃあ……ちよつと控えめな感じで……。こちらはどうぞでしょうか？」

そう言つて美音を取り出した国産ウイスキーのボトルに、トクは、ほう……と見入つた。

「このボトルは見たことがあるな」

「燻製香はウイスキーの持ち味でもあるんですが、日本人の中には苦手だとおっしゃる方も多いんです。でもこの銘柄は、日本人の舌に合うように造られていて、スモーキーなタイプはちよつと、つておっしゃる方にも人気なんですよ」

このウイスキーのほのかな甘みは、みりんの甘みと相まって肉厚なカワハギの味わいを引き立ててくれるだろう。

「よし、こいつは呑んだことはねえが、美音坊がすすめるなら間違いないだろう。それにするよ」

「はい！」

馨が元氣よく返事をして、大きなグラスを取り出す。美音はその横で、カワハギのみりん干しを焼き始めた。

「くーっ！ いいねえ、この甘い香り！」

焼き網の上でカワハギが徐々に乾き始めた。それにつれて、みりん干し特有の甘辛い匂いが広がっていく。その香りに陶然となりながら、トクは氷がたつぷり入れられたグラスを傾けた。

「おおーっと、こいつはちよつと予想外だな」

「え、どうしましたか？」

口に合わなかつたのだろうか、と心配しながらトクの様子を窺うと、彼はとても嬉しそうな顔をしていた。どうやら嫌いな味ではなかつたらしい。

「なんていうかな、確かに燻製香がある。あるんだが、ちよつとも嫌じゃない。俺は燻製香が苦手だとばかり思い込んでたんだが、程度の問題だったんだな」

若々しくて新緑みたいに爽やかな味だ、とトクは目を細める。

「ごくごくやちまいたいところだが、それじゃあもつたいねえ。ゆっくり味わうことにするよ」

「あら……」

のどが潤いているだろうからと薄めの水割りにして出した。それでも、トクはその一杯を大事に味わいたいという。美音は、お酒を大事に思うトクの気持ちが嬉しかった。

「はい。お待たせしました！」

皿にのせたカワハギは、尾が微妙によそを向いていて背骨と一直線になっていない。同じみりん

干しなのに、鰯いわしや鯛たいではあまり見られない姿に、美音はいつも笑ってしまふ。このそっぽを向いた尾といい、とんがった口といい、叱られてすねている子どものように見える。そんなにいじけなくとも、あなたの美味しさはちゃんとわかっているわよ、と言ってやりたくなるのだ。

カワハギの美味しさの理解者であるトクは、喜び勇んで焼きたてのカワハギに箸を入れた。『魚うぶ辰た』のミチヤの折り紙付きなだけあって、身の柔らかさも、甘さと辛さのバランスも絶妙。しばらくは食べることに以外に口を使う気になれないだろう。

黙々と魚をほぐすトクを、ズッキーニの炒め物とどんぶり飯を食べ終えたりヨウが羨うらやましそうに見ている。あれだけたくさん平らげたのに、まだ食べ足りないのかと美音はそこでも笑ってしまった。「リョウや、そんなに羨ましそうに見てないで、あなたもカワハギをもらったらどうだい？」

「いや、いいつす。もう月末だから、俺はこれで精一杯。ズッキーニの炒め物がギリつす」

「そーいや安いね、この炒め物……」

ウメが品書きの値段を見て驚いている。もともと安心価格の『ぼったくり』にしても、かなり安い値段だった。ズッキーニの仕入れ価格がゼロなのだから当然である。

「頂き物なんだよ。だから大特価でご提供。よかったね、リョウちゃん」

「大感謝つす！」

「ズッキーニなんてどこからもらったんだい？ ゴーヤならそこら中で余ってるだろうけどさ」

昨年こぞに続き、今年もウメのゴーヤは豊作。つい先日さきも届けてもらったばかりだった。だが、近隣きんりんでズッキーニを作っているうちなんて見たことがない。ウメが首を傾げるのも無理はなかった。

「それがですな……」

そこで美音は、今日の午後の出来事を簡単に話した。その裏には、ツキミよりも年上であるウメに、熱中症には気をつけてほしいという思いがあった。

「熱中症かあ……あたしも気をつけないとねえ」

「今日はことさら暑かったからなあ……無理もねえよ」

年としから年中外で仕事をしている俺たちですら、音おとを上げそうになつたぐらいだ、とトクも頷うなづいている。だが、リョウだけは他のふたりとは違う反応を見せた。

「でも、あの川原の畑はたけってそろそろヤバイって聞いたけど、平気なんすか？」

「ヤバイってどういうこと？」

「河川管理上の問題とかなんとか、ニュースで言ってた気がするつす。許可を得てやってるならいいけど、今はあんまり許可も出ないって……」

河川敷を無断で畑はたけにしている人々については、ニュースやワイドショーで何度も取り上げられている。美音も見たことがあったが、それとツキミの畑はたけを結びつけてはいなかった。

「古くからやってるところもあるから、なんとも言えないが……。そのツキミさんって人の畑はたけほど

のあたりだい？」

トクによると、昔からずっと畑だったのなら占用許可が下りることもあるらしい。だが、馨がツキミの畑がある場所を説明すると、トクは大きなため息を漏らした。

「あー……あそこらの畑は全部、許可なしにやってるもんだよ。もっと上のほうに二、三、私有の畑があるが、そこから下手は勝手に作り始めたのばっかり。元々あった畑を見て、じゃあ自分たちもって思っちゃまったんだろうな。近頃じゃ、違法だから立ち退けって看板があっちこちに立てられてる」

「そうだっけ……？」

馨が首を傾げた。美音も同様に首を傾げる。

川原に行くことは滅多にないし、前に馨と散歩に行つたときも畑自体に目が行つてしまい、そこに立てられている看板など気にもしなかった。

「最近、ゲリラ豪雨で急な増水があつたりして、河川管理がうるさくなってきた。川原を耕すと地盤が緩んで危ないし、違法の畑は強制的に撤去する方向みたいだな」

あっちこっちの現場で足場を組んでいるトクは、公共事業に携わることも多い。現場のこぼれ話から拾ってくる情報の信頼性は高いので、おそらくこの情報も間違いないものだろう。

「じゃあ、ツキミさんの畑も……」

「たぶんアウトだな」

「そんな……」

不法占拠は確かによくない。ツキミの後ろめたそうな様子からして、悪いことをしているという自覚もありそうだ。けれど、ツキミは自分の楽しみもさることながら、アレルギー体質である孫に安全な野菜を食べさせたくて畑をやっているはずだ。もしもあの畑が使えなくなったら、困ってしまうだろう。

——ツキミさん、大丈夫かしら……

彼女がくれたズッキーニはまだいくつか残っている。その深い緑色に目をやりながら、美音は一心に煮込み料理を作っていたツキミに思いを巡らせた。

+

それから三日後の昼下がり、美音はいつものウォーキングの行き先を『スパー呉竹』から例の川原に変更した。特に買わなければならぬものはなかったし、畑の撤去問題の成り行きも心配だったからだ。

『スパー呉竹』よりも川原までのほうが距離がある。あまり暑いと辛いと思っていたが、幸いな

ことに空は灰色。雨が降り出しそうというほどでもなく、むしろ長い距離を歩くにはもってこいの天気だった。

畑の手入れは朝からする人が多いと聞くし、先日ツキミからもらった野菜も朝穫あさとったばかりのものだと言っていた。おそらくツキミも畑仕事は午前中に済ませているのだろう。今行ってもないかもしれない、と思いつつも、美音は川原に続く道をせつせと歩く。

川沿いの道に辿り着き、確かこのあたりだったはず……と以前、大玉のトマトを感心して眺めた畑に行ってみると、そこにはたくさんの方の警告看板が立てられていた。

書いてある内容は皆同じ、畑の撤去を促うながすものだった。

作ってはならないところに畑を作った人が悪い。そう言われてしまえばそれまでだが、ツキミの事情がわかっているだけに、美音はいたたまれない気持ちになってしまう。

「……」

と、そのとき、何本も植えられたトマトの間からツキミがひょっこり現れた。道に佇たたくんで畑を眺めている美音を認めて、おや？ という顔になる。

「ツキミさん！ まだいらっしゃったんですね。こんにちは！」

「ああ、あなたかい。この前は本当に世話になったねえ」

「いいえ、ぜんぜん。こちらこそ、お野菜をたくさんいただいたてありがとうございます」

あの日、『本日のおすすめ』に入れたズッキーニと豚肉の炒め物は大人気で、常連たちが、本当にこんな値段でいいのか、なんて心配するほどだった。中には真っ赤に熟した大玉のトマトを見つけて、頼むから丸かじりさせてくれと言いつけ出す者まで出てくる始末。

頂き物のトマトの丸かじりでは、いかにうちが『ぼったくり』とはいえ値段のつけようがありませんでした、と美音は苦笑いとともに報告した。

「それは悪いことをしたねえ」

「とんでもないです。どれもすごく美味しくて、これならいっそ、お客さんからお金がいただけるように、ちゃんと仕入れさせていたかどうかと思っただけです」

「そりゃあいいや。野菜は穫とれすぎて困ってるぐらいだし、あたしもいい小遣い稼かせぎになるよ……と、言いたいところだけ……」

そう言ったあと、ツキミは畑の周りにここぞとばかりに立てられている看板に目を移した。

「この畑は今年限り。来年になったらお役所が来て、ブルドーザーで潰つぶしまっ……」

あんなのところに納めるどころか、孫が食べる野菜も作れなくなってしまう、とツキミは肩を落とした。

「もともと、悪いことだとはわかってたんだ。わかってたけど、みんなやってるし、大丈夫だろうってさ。実際、何年もお目こぼしされてたし、このままいけるんじゃないかって甘いこと考えてた」

「ツキミさん……」

「川原の畑が撤去されたつてのは、よそでも聞いた。川原を耕^{たがや}したら地盤も弱くなるんだつてね。最近はその場所で堤防が壊れて大きな水害になったこともあつたし、役所だつていつまでも呑気に構えちゃられないさ」

「しょうがないよ……と口では言いながら、ツキミは何度もため息をつく。

「どこか別の場所に移ることはできないんですか？」

「場所があればねえ……でも、都会じゃ空き地なんてそうそうありやしない。そもそも地面が見えてるような土地は学校ぐらいじゃないのかねえ……。前に一度、校庭の隅っこでも使わせてもらえないかつて掛け合つたんだけど、門前払いもいとこだった」

「今は不審者も多いし、放課後や休みの日は生徒さんたちですら自由に出入りできないみたいですね。それに、学校つて公共機関ですから、個人の畑を作るのはちょっと……」

「そうらしいね。ま、無農薬とか自然農法とかいう野菜も売つてないわけじゃないし、孫の分は買うしかない。あれは普通の^に比べるとずいぶん割高だけど、背に腹は替えられない。娘夫婦だつて裕福なわけじゃないから、少しでも助けてやりたいと思つてあたしが作つてただけど、畑がなくなるんじやどうしようもないからさ」

「今まで作れただけでも御の字だと思わなきゃね、とツキミはまるで自分に言い聞かせるように

語つた。美音はそれ以上何も言えず、手助けできない無力感に苛^{さいな}まれるばかりだつた。

その夜、『ぼつたくり』には、ツキミが野菜をくれた日と同じく、ウメ、リヨウ、トクの三人が座つていた。偶然にしても珍しい、と思つていたら、どうやら美音から話を聞いた馨がSNS上の『ぼつたくりネット』に情報を流し、それを見た三人が店にやってきましたというこらしい。

「いや、俺たちもどうなつたか気になつてたし。あ、どうなつたかじゃないすね、これからどうするのか、か」

リヨウの言葉に、ウメもトクも頷く。本当にうちの常連さんたちは気のいい人ばかりだ、と美音はほっこり笑う。だが、馨はほっこりどころではなかつた。

「お役所つて血も涙もないよね！ 事情ぐらい考えてくれてもいいのに！」

馨は突き出しの切り干し大根の煮物が入つた小鉢を三人に配りながら、ぶんぶん怒つている。大根の煮物は『ぼつたくり』の人気メニューのひとつだが、春から秋口までの暑い季節は冷めても美味しい切り干し大根の煮物を喜ぶ客が多かつた。

切り干し大根と細切りの豚肉、人参をまとめて箸でつまみながら、ウメが痛ましげに言う。

「個々の事情なんて取り上げてたら切りがない。お孫さんを思う気持ちはわかるけど、どうしようもないよ」

ウメにも孫はいる。アレルギー体質ではないけれど、怪我が多いので心配は絶えない。ツキミが孫を思う気持ちがわかるだけに、ウメも辛い気持ちになったのだろう。

「でも、馨ちゃんたちが感心するほど見事な畑が作れるなら、農家の出なんじゃないのかい？ 子どもとか親戚が畑をやったりしないのかねえ……」

「たぶん、やってないでしょうね……」

美音はちよつと考えたあと、そんな返事をした。もしそういう状況なら、わざわざ違法な畑作りをしなくてもいい。遠慮深く礼儀正しいツキミが、立ち退き^{おと}勧告の看板を立てられてまで川原で畑を作り続けているという時点で、他に方法がなかったとしか思えなかった。

「そうだよ。親戚に農家がいるなら、力になってくれるだろうし……」

既に農家をやめて土地を手放したか、うんと遠くに住んでいるか、そのどちらかだろうと馨も言う。美音にしても、ツキミの親族がアレルギー体質に悩む親子を見捨てるとは思いたくなかった。

「いずれにしても、川原の畑は風前の灯火^{ともしび}です。事情が事情だけに気の毒だけど、こればかりは……」

「どこか他に野菜を作れる場所はないのかしら……」

安心して食べさせられる野菜がなくなったら、ツキミはもちろん、娘さんも困り果てる。お孫さんだって、おばあちゃんの気持ちがたつぷりこもった野菜を食べられないのは、さぞや寂しいこと

だろう。

みんなが同じ思いでいる中、ウメがぼつと顔を輝かせた。

「貸し農園とかはどうなのかね？ ああいうところを借りれば……」

「ウメさん、貸し農園ってけっこう倍率高いっす。特に都内で使えるところとなったら週末のテニスコート並みの倍率じゃないっすか？」

「しかも近場にはねえ。バスに乗って畑に通うなんてやっかいすぎる。何より、ああいうところは年間契約とかが多いだろう？ 前の人が農薬を使ってないとは限らねえ。そいつはちよつとまずかねえか？」

「そうかい……いい考えたと思っただけだねえ……」

残留農薬、そしてそもそも申し込んでも当たらなければ使えない。リョウたちのテニスであれば、まあ仕方ない、また来週、で済むけれど、畑となるとそうはいかなかった。

「そこら中にプランターでも並べまくるしかねえな」

「とはいつてもねえ……」

プランターでズッキーニや大玉のトマトが作れるだろうか。どう考えても里芋は無理そうだ。たとえ作れたにしても、プランターから収穫できる量では足りないかもしれない。

その日もツキミ一家を救う方法を見いだせないままに、常連たちは『ぼったくり』をあとにした。

「あれ……?」
小ぶりのガラス容器に入れられたスープを一口飲んで、いつも遅い時間に来る客——かまめ要が意外そうに呟いた。

要が来るような時間になっても暑さは引かず、彼は現場帰りのトクにも負けないほどの汗を、額に浮かべていた。どうせ空すきつ腹だろうし、酒を呑む前に何かお腹に入れてほしいと思つた美音は、突き出しの代わりに冷製スープを出した。

白っぽいスープに真緑のオクラの薄切りを浮かべた、目にもお腹にも涼しい一品。要は添えられた木匙きじで掬すくって口に運んだとたん、怪訝けげんな顔になつた。

「ジャガイモだと思われました?」

「ああ。だつてこの時期にこんなに白くて冷たいスープが出てきたら、誰だつてそう思うだろう」
「そうですね。ビシソワーズは夏のご馳走ですものね。でも、それだけに皆さんあちこちでお飲みになつてるかなあ……つて」

「それで食材を変えてみた、つてわけか」

「そうなんです。実はそれ……」

「ちよつと待つて、おれに当てさせて」

そして要は、器の中身をじっくり眺めたあと、もう一匙スープを口に運んだ。

「うん、わかつた。これ、里芋だ!」

「正解です。よくわかりましたね」

「ジャガイモに比べてとろみが強いし、トッピングがオクラだったから、たぶん和食材だろうなつて」
君はそういうところに拘こだりを持っていそうだし、と要は笑う。

そういうところつてどういうところだ、と突つ込みたくなつたが、訊きいてもいい返事が返つてきそうにない。聞かぬが花だとはかりにスルーして、美音は『本日のおすすめ』の品書きを差し出した。
「えーつと……魚は昼に食つたし……」

「よかつた。今日は、ちゃんとお昼を召し上がったんですね」

魚を食べた、ということはおそらく定食だったのだろう。忙しさのあまり、昼食が食べられなかったり、簡単に済ませたりすることが多い要が、きちんと食事をしたと聞いて、美音はほつとした。だが、要がちゃんとした昼食を取つた事情は、安心してばかりもいられないものだった。

「取引先と打ち合わせがあつてね。本当は昼までに終わるはずだったんだけど、ぜんぜん話がつかなくてランチミーティング突入」

昼時だから定食屋やファミレスは客で一杯。やむなくちよっと高そうな店に入って、打ち合わせを続けながら食事をしたものの、味わうどころではなかったのだと彼は言う。

美音が安堵で漏らした息は、たちまちいつものため息に逆戻りである。

「ご飯もしっかり味わえないなんて、相変わらずお忙しいんですね……」

「しょうがないよ、もうぎりぎりだし」

「ぎりぎりって、もしかしたらあの？」

「そう、例のショッピングセンター」

『ぼったくり』から少し離れたところにあつた社宅を取り壊し、新しいショッピングセンターを作ると聞いたのは昨年のお話だ。要はその工事に関わる仕事をしているらしい。あれから一年が過ぎて、建物の外観はすっかりできあがったように見える。オープンまであと一ヶ月半ほどのはずだが、まだ決めなければならぬことがあるのか、と美音は意外な気がした。

「中身は固まったんだけど、外回りがね」

実は建物の内部で仕様変更が相次いで、予算が足りなくなってきた。施主も外回りにかける予算を削らざるを得ないことはわかっているのだが、理想と現実の折り合いがつかない。さつさと決めて取りかかりたいのに、ちつとも進まないのだと要は嘆いた。

「特に屋上。元々の計画では、緑化推進つてことで屋上に大きな庭園を造ることになってたんだ。

そうすれば客も一休みするために屋上まで上つてくれるだろうつて。でもあれつてかなり金がかかるんだよ。コストを抑えてなんとか形をつけることはできても、庭は造りつぱなしというわけにはいかない。あとの管理にもけつこう金がかかるんだよなあ……つて施主も頭を抱えてる」

施主の言うとおりに建てるのが仕事だけれど、予算にも工期にも限りはある。屋上緑化は流行だし、温暖化防止のためにも是非とも取り入れたいが、ない袖は振れない。それでも施主はさかんに環境保護を提唱している企業だけに諦めきれないのだろう。

「はあ……大変ですね……」

「まったくね。予算的には土を入れるので精一杯、植栽まではとてもじゃないけど……」

「土……」

美音は思わず、手を止めた。昼食に魚を食べたという要は、先日のリヨウと同じく、豚肉をたっぷり入れたズッキーニの炒め物を注文した。ズッキーニも、スープに使った里芋とオクラも、せっかく来たんだから持つてお帰りよ、とツキミが袋に詰めてくれたものである。

「あの……その土つて、畑とかにも使えるんですか？」

「畑？ ああ、野菜や花を作ったりできるかってこと？ 木を植える予定だったんだから、たぶん大丈夫じゃないかな」

「じゃあ、農園として貸し出すとか……だめでしょうか？ このあたりには市民農園がないし、使

いたい人はきつと思っうんですよ。そしたら管理にお金もかからないじゃ……？」

全くゼロにはならないにしても、庭園の手入れよりは少なくて済みそうだと思う。なんといつても市民農園は、その『手入れ』をしたくて借りる人ばかりなのだから……

美音の言葉を聞いて考え込んでいた要は、ほどなく頷いた。

「市民農園、それはありだな。でも、どうして急にそんなことを思いついたの？」

君も野菜作りがしてみたいの？ と真顔で訊かれ、美音は大きく首を横に振った。

「実は、川原で畑をやってる方がいらっしやるんです。お孫さんがアレルギー体質だそうで、身体に負担をかけないように無農薬で野菜を作ってるんですって。でも、あの川原……」

「ああ、このことかはわかった。あそこは今年度中には強制撤去になるみたいだね」

何度撤去を促しても従わない人ばかり。これはもうどうしようもない、ということで行政側も一斉撤去という強硬策に出るらしい。要が聞いたところによると、おそろく年明け早々に実施されるだろうとのことだった。

「やっぱり……」

「それで君は、あそこの畑がなくなったら困る人がいる、他に場所はないかって探し回ってたってわけか」

「探し回ってたってほどじゃありませんけど……」

「でも君のことだから、あれこれ考えたんだろう？ どこかに土地がないかなあ、なんてさ」

「凶星です」

もしも町内、いや少しぐらい離れていても、空き地があったら頼みに行ったかもしれない。その空き地の使い道が決まるまでの間だけでもいいから、野菜を作らせてくれないか、と交渉しただろう。けれど、ツキミも言っていたとおり、この界隈に空き地などひとつもない。唯一空き地になった住宅の跡地は、ショッピングセンターになることが決まり、あつという間に工事が始まってしまった。やっぱりどうにもならないのか、と思っていたところに要がやってきて、ショッピングセンターの屋上の話を始めたのである。土はあるが、そこに何かを植える予算はない、と……

それならば、その土を畑に使い、借りた人に好きなものを植えてもらえばいいではないか。もともと庭園にするつもりだったのなら、水道ぐらい引いてあるはずだ。水の使用料も含めて、賃料を取ればいいではないか——

美音は必死に言い募った。

要がどれほどの権限を持っているかはわからない。でも、プランを話し合う立場にあるのなら、提案してもらうことぐらいはできるだろう。取り入れてもらえるかどうかなんてわからないけれど、とにかくツキミのために何かしたかった。

「わかった！ わかったから、ちょっとそれは置いて！」



要が降参、とばかりに両手を上げて言う。それもそのはず、美音は右手に包丁を持ったまま熱弁をふるっていたのだ。要が白旗を揚げるのも無理はない。

「ごめんさい、つい……」

美音は照れ笑いを浮かべつつ、刃先をズッキーニに戻した。今度は脱線することなく切り終え、フライパンに火をつける。料理人の務めに戻った美音に安心したのか、要は屋上の使い道について、施主に提案してみると約束してくれた。

「受け入れてもらえるという保証はできないけど、とにかく提案してみる。市民農園にするなら、しばらく土を入れたままで放置しておいても言い訳が立つし、案内施主も気に入るかもしれない」

「ありがとうございます！」

「まあ、なんにしても君が野菜を作り始めるんじゃないよ
てよかったよ」

「え、どうしてですか？」

「ただでさえ、荒れやすい肌なのに、毎日水仕事。その上、土いじりなんてとんでもないよ」

「え……あ、そう、ですね……」

要の母、八重が、美音の手荒れを心配してハンドクリームをくれたのは、つい最近のことだ。

体調を崩した八重のために作った茶がゆのお礼ということだったが、それにしてもあまりにも高価なブランド品。だがそれだけに効果は顕面だった。

あのハンドクリームを使い始めてから、美音の手は娘らしい柔らかな肌に戻っていた。

「せっかくのお母様のお気遣い、台なしにするわけにはいきませんよね」

「いや、どうしてもやりたいなら止めないけど、君のことだからとことん熱中して大変なことになりそうじゃないか。もうさ、堆肥とかも手作りしそうだ」

「やりませんってば。第一、私、プランターとか植木鉢なら得意ですけど、それ以上は手に負えません」

「ああそうか。夏休みの自由研究……」

「そういうことです」

来る夏、来る夏、自由研究は植物の観察だった。忙しい両親の手を煩わせずに済むから……という話を要は覚えていてくれたらしい。

「私って、運動神経もなければ筋力もないんです。耕したり、草を抜いたり、堆肥をひっくり返したりなんて無理に決まっています」

「それを聞いて安心したよ。畑でへとへとだから営業時間を短くする、遅い客はお断り、なんて言われたらどうしようかと思った」

「言いませんって」

軽く返しながら、美音は要をそつと窺う。

馨が帰ったあと、もう暖簾をしまおうかと思うような時間に、からりと引き戸が開けられる。その瞬間を自分がどれほど待っているか、この人はちつともわかっているまいだろう。他の客を迎えるときは違う感情を、もう否定することはできなかった。

けれど、居酒屋の店主としてそんな感情を表に出すわけにはいかない。あくまでも他の客と同じように接する努力を続けてきた。だから、気持ちに気付かれていないことを喜ぶべきなのに、込み上げる寂しさを持て余す。

複雑な心情の中、美音はズッキーニと豚肉を炒め終え、要の酒の減り具合を確かめた。

グラスに入っているのは、『澤乃井 涼し酒』。東京都青梅市にある小澤酒造による季節限定の生貯蔵酒である。

かすかに漂う酸味が夏の暑さを忘れさせ、柔らかな口当たりはつい「もう一杯」とグラスを差し

出させる。しかも、アルコール度数は十三度から十四度と日本酒にしては低めで、多少呑み過ぎても大丈夫な造り。

東京の地酒、しかも四月下旬から八月の間しか手に入らない限定品という要素も加わって、『ぼつたくり』では夏の人気商品となっていた。

汗を掻いて入ってきて、まずはこちらを、と差し出された酒を一口呑んだ要は、軽い呑み口に目尻を下げた。これなら呑んだあとでも仕事ができそうだ、と喜んだところをみると、今でも夜中まで仕事をせねばならない状況は続いているらしい。

シヨッピングセンターの工事は大詰め、しかも彼が携わっている仕事は他にもあるのだろう。窓際に追いやられるよりは忙しいほうがいいとは思うけれど、やはり身体のが気にかかる。

ツキミを思うあまりつい口にしてしまったものの、屋上を市民農園にしてはどうかという提案が彼の仕事を増やすことにならなければいいが……と、美音は心配でならなかった。

+

「要さんって、もしかしたらけっこう力のある人かもしれないっす……」

ツキミの一件を要に話してから一週間ほどしたある日、カウンターの一席を占めたリョウが少し

遠い目をしながら呟いた。

「どういうこと？」

隣に座っていたアキが怪訝そうに問い返す。

今日は土曜日で、ふたりは例によってテニス対決を済ませてきた帰りである。なんでも、珍しく土曜日の午後三時に予約が取れて喜んだのはいいが、あまりの暑さにはからから、動き回ってお腹もぺこぺこ。これはもう『ぼったくり』に突撃するしかない、ということ、開店を待ちかねたように現れた。何かにつけ意見を異にするふたりだが、今日に限っては完全一致。他に選択肢なし、とばかりにぎんぎんに冷えたビールを一気呑みした。そのあと、肴も二、三、お腹に入れて、ようやく心地がついたところである。

手酌でビールをグラスに注いだリヨウは、考え考え言葉を繋ぐ。

「昨日、アンケートサイトを見てたんすけど……」

市場調査会社に勤めているリヨウは、よその会社がどんな調査を請け負っているかが気になってアンケートサイトを見て回ることがあるらしい。先日も、とある大手アンケートサイトを見に行ったら市民農園に関する調査があった。ツキミの件が気になっていたリヨウがそのアンケートページを開いてみたところ、この界隈に家庭菜園に興味を持っている人がどれぐらいいるか、という調査だったそうだ。

リヨウからツキミの一件について簡単に説明を受けたアキは訝しげな顔をした。

「ええ？ あんたって、そういうアンケートには答えられないんじゃないの？」

調査会社に勤めている人間は、アンケートの対象から外されるはずなのに、とアキが言う。リヨウは頷きながらも、実際に答えなくてもある程度のこととはわかるのだと言った。

「設問はたいいてい、性別、年齢、居住地区……って訊いていくんす。どこかで条件から外れば質問は終了。で、職業は結構あとのほうで訊かれるから、それまでの段階で、どんな年齢層のどういう場所に住んでる人が対象の調査かがわかるっす。で、たまにアンケート自体にタイトルが付いてるときがあるんすけど、俺が昨日見たのはものすごくわかりやすかったっす」

「どんな？」

「家庭菜園についてのアンケート」

「まんまだね。で、このあたりが対象だったのはどうしてわかったの？」

「俺のアパートは、結構離れてるけどこの商店街と同じ区内。居住地区入力で弾かれなかったんだから、対象はこの区を含んでるんす。どこまでが対象かはわかんないけど……」

「なるほどねえ……さすが同業」

感心したように頷くアキを放置して、リヨウはカウンターの向こうの美音を見上げた。

「美音さん、新しいショッピングセンターの屋上を市民農園にしてはどうかって要さんに提案し

たつて言ってみましたよね。あれからまだ四、五日しか経ってないのに、もう調査会社に依頼が入ってる。相応なやり手じゃないと、こんなことにはならない気がするっす」

「そうよね……ものすごく忙しそうだし……」

「あんなに忙しそうにしているのに仕事ができないとしたら、気の毒すぎるよね。空回りからまわりもいとこじゃない」

「アキさん、辛辣せんりゃく」

からからと笑っている馨の横で、美音はちよつと首を傾げる。少なくとも要は一生涯命仕事をしている。定時で仕事を終える日などないのだろう。ただ、『力のある人』かどうか、美音にはわからなかった。

「オーブンも迫ってるし、他のアイデアもないし、つてことじゃないのかしら？ 必ずしも力があるとは……」

「でもね、美音さん。たとえ工期がぎりぎりだつて、とりあえず上に掛け合つて会議の二つ三つ通してから、つていうのが普通じゃない？ 会社つてそういう面倒くさいところあるでしょ？ それをすつ飛ばして調査を依頼してきたつてことは、会社は要さんを相当認めてるつてことだと思つてこの人が言うんだから問答無用……とか？」

「俺もそう思うっす。しかも、この短期間でアンケート作らせて調査開始なんて、普通ならあり得

ないスピードです。それをやらせるだけの力があるつてことっす」

「へえ、そうなんだ……だとしたら頼もしいねえ」

馨が感心したように呟いた。

「この町からの要望もばんばん伝えて、取り上げてもらえばいいんじゃない？」

そそのかすようなアキの言葉に、さすがの馨も、そんなことでできないよ、と笑う。

「とにかく、このまま行けば新しいショッピングセンターの屋上は市民農園になって、川原で畑をやってる人もそこに移つて問題解決。きつとツキミさんも大喜びね」

お孫さんのためにもよかつた、とアキはほつとしていた。もちろん、利用者が多ければ抽選になるのだからけれど、可能性がゼロよりはよほどいい、ということだろう。

ショッピングセンターの開業は十月。要によると、川原の畑は年明け早々に強制撤去となるらしい。逆に言えば、川原の畑で秋の収穫を終えたあとショッピングセンターの畑に移ればいいということになる。それからでも春野菜の種蒔まききや苗付けには間に合う。ツキミも娘さんも、そしてお孫さんも胸をなで下ろすに違いない。

「うまく決まればいいね。でもつて、そろそろショッピングセンターがどんな風になるのかも知らせてほしいなあ……」

中に入る店はおおよそわかつてきた。馨がぬかりなく求人情報をチェックし続けていたからだ。

依然としてわからないのは、トモの言うところの『核になる店』だけである。商店街の敵とならず、なおかつ閉店する『スーパー呉竹』の代わりになるような店が入ってほしい。それは、この界隈かいわいの人々の共通した願いだった。

十

『核となる店』についての情報がもたらされたのは、オープンまであと一ヶ月となった九月初旬のことだった。しかもそれは、想像以上に好情報で、馨などは安堵のあまり怒り始めたほどだ。

「もう！ それならそうと言ってくれればいいじゃない！」

「まあまあ、そう鼻息を荒くしなさんな。呉竹さんがショッピングセンターの中に移ってくれるなら、御の字じゃねえか」

カウンターに座ったシンゾウが笑いながら宥めても、馨の怒りは収まらない。

「あたしたちみんな、あんなに心配したのに！ 呉竹さん、大丈夫なのかな、これからの買い物はどうなるのかなってー！！」

お姉ちゃんなんて、ウオーキングの行き先がなくなって全然運動しなくなっちゃうんじゃないかとまで思ってたのに、なんなのこのオチは、と馨が文句を言い続けているところに入ってきたのは

トモだった。

「こんばんは。どうしたの馨ちゃん？ 外まで声が丸聞こえよ」

「トモさん！ 新しいショッピングセンターに入るのって、呉竹さんだったんだよ！ それならそれで、閉店じゃなくて移転だって知らせてくれればいいと思わない？」

「はいはい、きつと馨ちゃんがそんなことを言ってるだろうと思ってたのよ、来て正解だったわ」

トモは、意味ありげに微笑んだあと、とりあえず一杯呑んでから、とライムチューハイを注文した。今日は恋人のイクヤと一緒にではないから、軽めの酒を選んだらしい。

「私も今日聞いた話んだけど、『スーパー呉竹』は最初は閉店するつもりだったらしいわよ」

「え、そうなんですか？」

目を丸くして問い返した美音に、トモはライムチューハイを一口呑んで答えた。

「そう。新しいショッピングセンターができるなら、その中にスーパーかデパートが入るだろう。きつと輸入食材や雑貨も扱う。今でさえぎりぎりの経営状態なのに、これ以上はもう持ちこたえられない、って撤退を決めたらしいの。でも……」

あの場所からの撤退、土地の売却を決めたところで、ショッピングセンターを作ろうとしている大手流通会社から連絡があり、『スーパー呉竹』の跡地を駐車場及び巡回バスのステーションとして利用したいと言われた。

『スーパー呉竹』としては願ってもない話で、早速商談が始まった。ところが話が半ば決まりかけたころ、少し値を下げてもらえないか、という申し出がなされた。

驚いて事情を聞いてみると、計画に変更が相次いだことで、資金繰りが厳しくなった。けれど駐車場や巡回バスステーションは是非とも作りたい。ついては売価を下げてもらえないか、その代わりに、賃貸料を割り引くから新しくできるショッピングセンターに『スーパー呉竹』を出店してみようか、という話だったそうだ。

「もうすっかり撤退する気になってたから、呉竹さんの経営者は面食らったそうだけど、土地は売れるし、商売も続けていける。しかも、呉竹さん自身がショッピングセンターに入るのであれば競合問題もなくなる。多少土地の値段を下げてでもメリットは大きい、って考え直したそうなの」

「はあ……そいつはなんというか、都合のいい話だなあ」

シンゾウが半ば呆れたように言った。

「でしょ？ 渡りに船って感じよね。で、急遽方針変更して、出店準備を進めたそうよ。あれこれ検討や手配をして、やっと告知できるようになりました、って事情だったんですって」

「なんだ……そうだったの。じゃあ、仕方ないわね。最初から移転って決まってたんじゃないんですもの」

トモの説明を聞いて、美音はようやく納得がいった。移転することが決まっていながら『閉店し

ます』なんて貼り紙をするのはおかしすぎる。お客さんが離れる理由にしかならない、と首を傾げていたのだ。途中で事情が変わったのであれば、無理もない話である。

「そっか……じゃあ、仕方ないか。でもまあ、あの流通会社もいいところあるよね。自分のところのスーパーじゃなくて、地元の呉竹さんに声をかけるなんて」

「いいところがあるのか、他にやむにやまれぬ事情があったのか、ちょっと読めねえところだがな」シンゾウは、もしかしたらタクのとーちゃんあたりが一枚噛んでるのかもな、と呟いた。それでも、『スーパー呉竹』がこれからもこの町で営業を続けると聞いて、嬉しそうだった。相変わらず、要のことを『タクのとーちゃん』と呼び続けるシンゾウに、周囲から小さな笑いが起こる。笑いが収まるのを待って、トモがまた口を開いた。

「でね、呉竹さん、今まで店頭で小さく扱ってた苗や種、園芸用品なんかも置くんですって。あんな場所なのに、そんなところに手を広げて売れるのかしら？」

「あ……」

それを聞いた美音と馨は、思わず顔を見合わせた。ショッピングセンターに入るスーパーが園芸用品を置く理由は、屋上の市民農園に関係があるのしか思えなかった。

「じゃあ、市民農園の話も決まったんだね！ やったー！」

「よかった……これでツキミさんも一安心だわ」

「え？ ツキミさんってどなた？」

「あのね、この間……」

きよとんとしているトモ、そしてシンゾウに事情を説明する聲は、先ほどまで怒り心頭だったことなど忘れ去ったようだった。

「そうか……これはますますあの男がらみだな。よし、美音坊、今度あの男が来たら、俺からだつて一杯出してやってくれ。それぐらいのこととしてやっても罰は当たらねえだろう」

「シンゾウさん、太っ腹ー！ じゃあ、お姉ちゃん、とびっきりのお酒、用意しておこうね！」

「とびっきりって言われても、うちじゃあ限界がありますけどね」

「あいつは値段をありがたがって酒を呑むような男じゃねえ。美音坊がこれぞと思うものなら喜んで呑むだろうさ。ついでに、つまみもいくつか見繕ってやってくれ。よろしくな」

「はーん」

明るく返事をして、美音は頭の中にある酒リストのページをめくる。

もうしばらくすれば残暑も遠のき、秋がやってくる。秋は新酒の季節だ。要が好きだと言った何本かの酒を照らし合わせて、とびっきりの酒を選ぼう。

シンゾウからだと告げながら柵にたつぷり溢れさせた酒をすすめる。要はちよつと驚き、それでも嬉しそうに口を付けることだろう。『よろしくお伝えください』なんて、照れたような顔で言う

かもしれない。そんな要を想像して、美音はほっこりと笑った。

『新しいショッピングセンターはこの町にとつて敵じゃない』——そう言った要の言葉を疑った日もあった。大丈夫だというのなら、根拠を示してほしいと願った日もあった。

けれど、ショッピングセンター内に入るのはこのあたりにはない種類の店ばかり、閉鎖されると思っていた『スーパー呉竹』も移転に留まった。無料バスは駅と新しいショッピングセンターの往復だけではなく、『スーパー呉竹』の跡地、つまり商店街の入り口近くまで来ることとなった。屋上には近隣住民が利用できる市民農園も設置される。ツキミだけではなく、悪いとわかっていながら川原を利用し続けていた人たちも、これからは安心して園芸に励めるのだ。

新しいショッピングセンターは敵どころか、この町の暮らしを豊かにしてくれるものだった。

彼の言葉は本当だった……。いや、むしろ本当になるように、必死に頑張ってくれたのだろう。

以前彼が言っていた『これまでやったことのない新しい仕事』というのは、きつとあのショッピングセンターの企画全般に関わることだったに違いない。経験がなく、新しい知識も必要とされる大変な仕事なのに、彼は一生懸命に取り組んだ。彼はこの町の住民ではないし、彼の家族が住んでいるわけでもないのに……

そう考えると、さらに要に対する感謝の念が大きくなった。

傷ナスのおすすめ

スーパーなどのお値打ち品コーナーで傷の入ったナスを見かけることはありませんか？

つやつやで濃い紫のナスの皮に傷が入ると見た目が台なし……ということでお値段を下げられることも多い傷ナスですが、意外な利点があります。ナスの皮には赤ワインと同じくポリフェノールが含まれているのですが、皮に傷があるものは無傷のナスよりもポリフェノールの含有量が多いのです。その量、実に通常の二倍。ポリフェノールには傷を修復する作用があり、ナスは傷を治そうとがんばってポリフェノールを作るんだそうです。

ポリフェノールには血流を改善したり肝機能を高める効果があるほか、アレルギーを抑制する効果もあると言われています。

傷があっても味に変わりはありません。美味しくて身体にいい成分がたっぷり入っている傷ナス。おまけにお値打ちときたら、見た目だけで毛嫌いするのはもったいないですよ？



澤乃井涼し酒 純米

小澤酒造株式会社

〒198-0172

東京都青梅市沢井 2-770

TEL : 0428-78-8215 (月~金 : 8時~17時)

URL : <http://www.sawanoi-sake.com/>

立ち読みサンプルはここまで

彼がこの町を大事に思ってくれているのは、ここに『ぼったくり』があるからだ。この店は居心地がいい、ここに来ると元気になるって言ってくれるし、家や職場から離れた場所にあるのにわざわざやってきてくれるのだからおそらく間違いない。この町を守るために、彼は懸命に努力してくれた。疲れ果て、愚痴を漏らすことを自分に禁じてまで、頑張り続けてくれた。

要が何を思っているかなんてわからない。もしかしたら彼は、この町のためというよりも、自分にとって心地よい場所を守りたかっただけなのかもしれない。それでも結果として、彼の行動はこの町のみんंना救った。どれだけ感謝しても足りないほどだ。そう思っているのは美音だけではな

いだろう。

——この場所をそれほど大事に思ってくれてありがとう。お礼にできることなんて何もなければ、あなたにとっての居心地の良さを保てるように努力します。あなたが疲れてやってきたときには、ちよつとだけ元気にして送り出せるように……

秋の気配が徐々に近づき、自分の中にも今までとは違う感情がある。それに気付いた今、美音は実りの季節の訪れが少し怖いような気がしていた。